博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　米谷 匡史　印

学位申請者　趙 沼振　（チョ ソジン）

論　文　名　「叛逆のバリケード」を歴史化する
—日大全共闘の「記録する運動」を中心に

趙沼振氏から博士学位請求論文「叛逆のバリケード」を歴史化する—日大全共闘の「記録する運動」を中心に」が提出されたことをうけ、2021 年 9 月 15 日開催の総合国際学研究科教授会にて審査委員会が選任され、審査が開始された。

審査委員会は、米谷匡史（教授、日本思想史・社会思想史）が主査を務め、岩崎稔（教授、主任指導教員、哲学・政治思想）、友常勉（教授、日本思想史・社会運動史）、安藤丈将（武蔵大学・社会学部教授、政治社会学・社会運動史）、シュテフィー・リヒター（ライプツィヒ大学・東アジア研究所教授、日本研究）、以上 5 人の委員から構成されている。なお、同論文は、8 月 9 日の事前審査を経て、改訂のうえ提出されたものである。

審査委員会は、各委員がそれぞれの見地から論文を精査し、詳細に吟味した上で、2021 年 12 月 20 日に、本学の中会議室にて、対面およびオンラインで公開の最終試験を実施した。その結果、本論文が評価基準に照らして、博士学位を授与する水準に達していると判断した。審査委員会は全員一致で、趙沼振氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であるという結論に至った。

【論文の概要】

本論文は、1960 年代後半の青年叛乱と呼ばれる学生運動のなかで、特に日大全共闘の運動をとりあげている。とりわけ、闘争の当事者たちによって同時代およびその後になされた、日大全共闘の活動を「記録する運動」の軌跡をたどることによって、出来事の特性や現代的な意味を考察する研究である。数多くの同時代資料をとりあげるとともに、日大全共闘の当事者たちが後に結成した「日大 930 の会」に対する参与観察や、当事者たちへのインタビュー調査を通じて、他にはないリソースを駆使した調査と考察を積み上げている。

本論文の構成は以下の通りである。

序章
第 1 章　『朝日ジャーナル』でたどる日大全共闘史
第 2 章　日大全共闘の「記録する運動」の始まり

第 3 章　日大全共闘を再記録する企て―「日大 930 の会」の活動
第 4 章　日大闘争の全体像に迫る―「中村克己君虐殺事件」
終章　　日大全共闘の実践からみる今日的課題

序章ではまず、「1968 年」の社会運動をめぐるこれまでの議論について、①世界システム論、②グローバル・ヒストリー、③反省的再帰的左翼運動史、④新自由主義的転回、という 4 つの観点から整理し、日大全共闘をいかに位置づけることができるのかを検討した。

第 1 章では、同時代において日大全共闘の運動を積極的にとりあげ、その発言を掲載していたメディアである『朝日ジャーナル』を参照しながら、日大全共闘の特質を検討した。日大全共闘における個人の主体性の確立という戦略と、そのための場をみずから生み出す「バリケードの構築」という戦術に注目している。日大全共闘には、前衛主義的な指導があったのではなく、自由に集結したすべての個人が「指導なき前衛」（秋田明大）として大学当局と直接に対峙する大衆性があったのである。

第 2 章では、日大全共闘のなかで生まれた、活動を記録するさまざまなメディアに注目し、日大全共闘の「記録する運動」の始まりを検討した。①記録本『叛逆のバリケード―日大闘争の記録』、②記録映画の二部作『日大闘争』『続・日大闘争』、③写真集『解放区`68―日大闘争の記録』をとりあげ、分析をおこなっている。これらは、現在もつづく日大闘争を記録する「日大 930 の会」の活動につながるものである。

第 3 章では、日大闘争を記録する「日大 930 の会」の活動内容と展開を検討した。日大全共闘においては、幹部でも役職者でもない一人一人が自らの経験を語り、記録している点が注目される。「日大 930 の会」の参加者へのインタビューや、同会から継続的に発行されたドキュメント『日大闘争の記録―忘れざる日々』をとりあげながら、「日大闘争を再記録する」企てを考察し、日大闘争が当事者たちによって歴史化されていく過程を論じている。日大闘争という出来事の記憶を抱えこみながら、その意味を自分たち自身に問いかける作業は今日も続いている。

第 4 章では、日大闘争の渦中で 1970 年に起きた「中村克己君虐殺事件」をとりあげ、体育会系の右派学生を動員しながら大学当局によって行使された暴力の様相について考察している。1970 年 2 月 25 日、日大文理学部の仮校舎があった京王線武蔵野台駅周辺でビラ配りをしていた日大全共闘商学部委員会の中村克己は、武装した体育会系の右派学生たちによる襲撃をうけて意識不明となり、数日後に死亡した。日大全共闘は、「中村克己君虐殺糾弾委員会」を結成し、真相究明にとりくんだ。大学の抑圧的な管理支配体制によって動員された右翼思想団体や体育会系サークルは、制度化された「暴力装置」となっており、それが警察権力と結びついて治安管理が徹底されていった。「日大 930 の会」は、「中村克己君虐殺事件」をとりあげ、日大闘争における死者をくりかえし想起し追悼しながら、日大闘争を「記録する運動」が生み出す今日的可能性を提示している。

終章では、「日大 930 の会」に至る日大全共闘の「記録する運動」の実践から、今日に

おいてどのような課題を提示することができるのかを検討し、日本における「1968 年」を論じなおす展望を提示している。

【審査の概要および評価】

2021 年 12 月 20 日に実施された公開の最終試験では、趙沼振氏が本論文の概要、本論文の学術的意義、そして今後に残された課題についてプレゼンテーションをおこなった。その後、審査委員と趙沼振氏の間で質疑応答が行われた。

審査委員のうち、ドイツからオンラインで参加したシュテフィ・リヒター教授は、本論文が今日の社会運動やその評価の停滞に抗いつつ、出来事を歴史化し記録することによって、「未発に終わった歴史の可能性」を救出する試みであると評価したが、これは審査委員全員が共有する判断でもあった。

また、巨大なマスプロ・マンモス私大である日大の全共闘運動については、東大全共闘に関する研究が数多く存在するのに対して、従来本格的な研究が少なかったが、市場化・商品化される高等教育・大学教育の矛盾を考察する際には、むしろ範例としてより優れた研究対象であるという指摘もなされた。さらに「中村克己君虐殺事件」という現在の外大キャンパスとは指呼の距離にある場所で起こった右派学生による虐殺事件を、忘却の淵から引きあげていることも強い印象を残した。

なにより「記録する運動」に注目するアプローチは独創的であり、新しい視野を拓いたといえる。審査委員は一様に、本論文の独自性と可能性を高く評価することとなった。

他方で、いくつかの疑問や批判も指摘された。①学生運動を評価するにあたって、「予示的政治／戦略的政治」という極めて刺激的なダイコトミー（二分法）を援用しながら、それが首尾一貫して考え抜かれてはいないと思われる点、②「中村克己君虐殺事件」をめぐる日大全共闘の語りに対しては、批判的な距離をとった考察が弱い面がある点、③理論的な分析において踏みこみが足らないという印象を残す箇所がいくつかある点、④日大闘争が残した遺産を、その後の資本主義の展開のなかで変容していく若者文化のレベルでいかにとらえるのかについて、十分に論じられていない点、⑤日大の体育会系の右派学生たちを用いたポリシングを論じているが、本論文で言及がある飯島勇のような元帝国陸軍軍人が民間警備会社を起業し、それが警察を補完するポリシングとなって大学闘争の鎮圧に関与していたことに踏み込めていない点、などが指摘された。

以上のような疑問や批判に対して、趙沼振氏の応答は的確であり、自らの論考で明らかにし得た点とその限界、今後に残された課題について明確に自覚したものであった。また、上記のような疑問や批判は、本論文の達成や貢献を高く評価した上で、さらに深めていくために提示されたものであり、その研究の意義を損ねるものではないことは、審査委員の共通認識である。

なお審査会場には、元日大全共闘の当事者 2 名（「日大 930 の会」メンバー）も参加し、最後にはフロアからの発言もなされた。それによって、趙沼振氏による日大全共闘を「歴

史化」する作業に対して、彼らが極めて大きな期待と共感を抱いていることが示された。実際、趙沼振氏はすでに、今後の日大全共闘研究を主導していく若手研究者として高い評価を受けている。

以上の審査をふまえて、審査委員会は全員一致で、趙沼振氏の博士学位請求論文「「叛逆のバリケード」を歴史化する―日大全共闘の「記録する運動」を中心に」は、社会運動史研究に対してオリジナルな貢献をはたす重要な研究成果であることを確認し、趙沼振氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であると判断した。